

# 子供時代の高田の風景

横浜磯子市

小川 弘（本町三丁目出身）

幼子の高田の町は空白あり

半分灼けし写真のように

兵隊が膝高く上げ行進す

原木の内より旗振り送りし

物心を覚えたのは戦争中の昭和の十七年頃で三歳の頃だろう。家は借家で本町三丁目の西側であった。左隣に長澤病院という内科の病院があり、右の方には数軒おいて木造の高田信用金庫があった。通りの向こう側の右手には洋風木造の市役所があり、入口のすぐ右側に歳を取った代書人が座っていた。

市役所の前庭にそれぞれ縦横一・五メートル程の大きさの立て看板にチャールズとルースベルトの似顔絵が画いてあり歩道に向いていた。その前に小石を入れた木箱があり、通る小学生達が石を似

顔絵に投げつけていた。高田には歩兵百三十連隊があり、戦地に動員される兵隊を皆で見送ったのであった。

故郷の山に向かへば浮かびくる

それを詠ひし天折の歌人

南葉山醜女のごとく思いしが

久しく見さればふくよかになる

子供の頃眺めた景色は記憶の何処かに刷り込みがあるのか、いつ見ても心が落ち着く。特徴のある妙高山とか米山を見れば、高田に帰ってきたという思いがする。南葉山は子供の頃から身近に眺めている山で、メリハリのないほてーとした塊があるだけで特徴が今一つない。小学生の頃、写生に南葉山を描いた事があったが、緑の山がぶつきらほうにあるだけ



で、構図も悪く、情けない絵になったことを今でも覚えている。しかし、還暦を過ぎた今、高田に戻るとこの変哲もない南葉山が懐かしく奥深く見えるから不思議なものだ。

青き海潮のにほひに興奮す

初めて浴びる直江津の海

味気なきテトラポッドを積み重ね

姿変わりし直江津の浜

三歳の夏、父に連れられて高田から直江津まで汽車に乗り初めて海水浴に行った。直江津の町を抜け、岡を登り切ると青い海が見え、潮の香りが強く匂った。

初めて海に入り、波に転がされて海水を飲んだ。塩辛く、咳き込んで泣いた。当時の海浜は広く、浜茶屋から海までも相当広かった。灼けた砂の上を走るのが大変だった。

高校生になっても直江津には泳ぎに行つた。当時の直江津の港ははしけ舢舨が着く岸壁があるだけで、小さな貨物船も沖に停泊して舢舨取りをしていた。関川が海に注ぐ所は、川の左側に鉄筋があら露わになったコンクリート・ブロックの堤防が七十メートル程海に突き出ており、そこでは雑魚やワタリガニを釣る人達が並んでいた。夏は静かな、のんびりした海だった。

